おわりに

今年度は、「災害と鉄道」をテーマに研究誌を作成しました。例年と比較して幾分異色の内容となりました。しかし、「公共交通としての鉄道の社会的責任」、「都市圏輸送問題」、「地方ローカル線の経営問題」、「通学と鉄道」など、過去の研究テーマとも共通する内容も取り上げることができ、過去の研究の流れをくむ研究誌にもなったと思います。

「はじめに」でも述べられているように、今年度の研究誌は「知る」という事を目的に作成されました。

過去にどのような災害が起き、鉄道にどのような被害を及ぼし、どのように鉄道が復旧し、いかにして現在、安全に鉄道が動いているか。災害による被害を最小限にするために、どのような対策が施されてきたか。近年、災害によって新たに浮かんできた問題点はどのようなものか。簡潔に言えば、以上のようなことを今年度の研究誌では概説していきました。

人間は「知る」という事により、成長します。「温故知新」という四字熟語が示すように、人間は過去を研究することによって、新しい知識を得ることが出来ます。

人間は「知る」という事により、記憶の風化をとどめることができます。1959 年の伊勢湾台風、1995 年の阪神・淡路大震災、2011 年の東日本大震災はもちろん、上記以外にも日本の鉄道に甚大な被害をもたらした災害は数多くあり、それらの災害を後世に語り継ぐことの一助を当研究誌は担っていると思います。

また、この研究を終えて、「災害」という切り口で「鉄道」を見ると様々な課題が見えてくる事も分かりました。我々の「鉄道」に対する見方に新たな一面が出来たようにも思います。

様々な内容を詰め込んだ結果、ページ数が 200 を越えてしまい、過去最大級の分量の研究誌となりました。「おわりに」まで、読んで下さった読者

の方にまず、感謝を申しあげたいと思います。

そして、執筆者全員に感謝を申しあげます。特に研究担当の方のおかげで今年度の研究を円滑に行う事が出来ました。今年度私が部長として「災害と鉄道」というテーマで研究に参加できて、非常に嬉しく思っております。本当にありがとうございました。

最後に、東日本大震災、台風第 12 号、第 15 号などで被害を受けた皆様にお見舞い申しあげます。被災地の早期復興をお祈り申しあげます。

一橋大学鉄道研究会第 49 代部長　　坊っちゃん